

本願寺史料研究所報

43号

発行所 本願寺史料研究所
〒六〇〇一八二六八

東京都下京区七条大宮上ル
龍谷大学大宮図書館内
電話 〇七五―三四三―三三三一

内線 (五四一八)

発行者 所長 赤松徹眞
発行日 二〇一二年九月一四日

近世地域真宗史料の宝庫

―琉球関係史料を中心に―

知名定寛

一 はじめに

周知の通り、本願寺史料研究所には膨大にして多種多様な史料が保管されており、とりわけ、大部分を占める近世史料の量は圧巻である。それだけに、いわゆる『諸国記』などの極く一部を除けば、保管史料全体を体系的に網羅した目録はまだ完成していない。筆者の存命中にはとても完成出来ないのではないかと思われるくらい大量の史料が保管されているのである。したがって、専従の所員でさえも未知の史料が眠っている可能性がある。

それ故に、特定の研究目的に沿って的確な史料を個人的に探し出そうとするならば、これ又、想像を絶する時間と労力とが必要とされるに違いない。

ところで、筆者が琉球の真宗に関する史料を初めて目にしたのは、実は当研究所においてではなかった。まだ龍谷大学の院生として在籍していた頃、ある書籍を捜し出すため、大宮図書館の検索カード(その頃、パソコン検索は想像すら出来なかった。)を繰っている時、突然、「琉球」という文字が目飛び込んできた。その瞬間、肝心の書籍のことは頭からすっかり消え去ってしまった、カードに記された書物の閲覧に走ったのである。この偶然の出来事が、筆者が琉球の真宗史について掘り下げていくようになる最初の契機であった。

検索カードの記事タイトルは「寛政元年己酉十月所贈於琉球国 示尼講中 功存師消息」で、「真宗小部集拾」所収と記されていた。早速『真宗小部集拾』を図書館書

庫から取り出して見ると、高僧の法話などを数点収載した和綴じの冊子で、その中に功存の消息も収められている。内容はタイトル通り、功存が寛政元（一七八九）年一〇月二二日付けで琉球の尼講宛てに著した書状形式の法話である。この年月日に加え、消息の書き出し部分の内容が、当研究所に保管されている史料の調査に着手しようと思いついた理由である。この時、それが如何に無謀であるか想像すら出来なかつた事は言うまでもない。

大袈裟に表現するならば、調査は足掛け三五ヶ年に及び、現在も継続中である。とは言うものの、実際は院生在学中の三ヶ年、それに龍谷大学を離れてからの三ヶ年ほどを加えた約六年間（第一次）と、二〇〇九年春から再開した第二次の調査であつて、実質期間は九ヶ年程に過ぎない。龍谷大学を離れてから二五年近く、諸般の事情により調査は長らく中断せざるを得なかつた。それでもこの中断期間、研究員の左右田昌幸氏がご自身の調査の折に偶々目にされた琉球関連史料の情報をご教示くださる事が時折あつたので、調査再開の必要性は痛感していた。三年前、ようやく自身周辺の条件が整い、所長の赤松徹眞先生のご了解も得られる事が出来たので、今回の第二次調査を開始したのである。

二次に亘る調査で蒐集しえた史料の多くは、後述するように、琉球の真宗史に新たな事実を提供し、先行研究の成果を大幅に塗り替える事が出来る画期的なものであつた。新史料を発見する度に、研究者名前に尽きる事を

大いに実感した次第である。

新発見史料は二回に分けて順次紹介し、その研究成果も幾つか発表する事が出来た。当然、その過程において新たな疑問も惹起してくる。とりわけ、史料解釈という点において理解に苦しんだのは、筆録された対象の実況の情景がイメージし辛いという事であつた。と言うのも、調査した史料は多種多様であるが、結果的に中心になつたのは『御堂日次之記』『長御殿御日次帳』『北御殿御日記』『起居筆記』などの日次記で、それぞれ本山内の異なる部局で作成された日々の記録である。その筆録者の記述の際の意識・態度あるいは方法に拠るものなのか、とにかく、筆録された内容の具体的な実況情景を復元イメージする事が実に困難なのである。勿論、日次記の性格上、事の次第を簡潔に筆録するのは当然かもしれないが、後述するように、その簡潔性が思わぬ史料解釈上の誤謬を招いてしまう可能性が生じてくる。

ここでは、二次に亘る調査によつて得られた史料の分析から、解明できた琉球真宗史における新事実の要点報告と、右記の史料解釈上の問題点を提示してみたい。その事が、今後、当研究所保管史料の調査を企図し、得られる史料を活用しようとしてされている方々の参考に少しでも資するところがあれば幸いである。

二 第一次調査の成果

まずは、検索カードで偶然見付けた「寛政元年己酉十月所贈於琉球国 示尼講中 功存師消息」の書き出し部分である。

宗祖知識の厚恩を崇重せらるゝによりて、遠国より年々志しを運れ候事随喜かきりなく覚候、それにつき愚老方へも珍しき土産の品度々贈りたまわり、同一念仏四海兄弟の宿縁と感喜するはかりに候。(以下略)

執筆者である第六代能化功存については紹介するまでもなからう。右によれば、琉球国の尼講中から年々懇志が献納され、功存にも何度か珍品が贈呈されているという。ここで確認出来る事柄は、寛政元(一七八九)年一〇月二二日時点で琉球に女性の信仰集団である尼講が組織されている、しかも従前から本山や功存に懇志・珍品を献上しているというから、琉球における女性の信仰集団の形成は寛政元年を更に遡るといふ事である。冒頭でも述べたように、この書き出し部分が、琉球における真宗の歴史について筆者が研究を開始する契機になった。何故なら、右の功存消息が先行研究においても全く知られていない最古の琉球真宗関係史料である事が即断出来たからである。

先駆的かつ現在でも代表的な先行研究である伊波普猷「浄土真宗沖繩開教前史 ― 仲尾次政隆と其背景―」(一

九二六年)は、嘉永六(一八五三)年真宗信仰が露顕して石垣島に流刑となった仲尾次政隆の生涯と信仰の内実に焦点を置いた論文であるが、この法難以前には文政七・八(一八二四・五)年頃、知念なる人物が薩摩から本尊を持ち帰り、その事が天保一〇(一八三九)年に発覚して知念は監禁されたという。つまり、先行研究で明らかにされている琉球真宗の最古の事例は、文政七・八年頃という事になる。したがって、功存消息は最古の事例を更に三五年ほど遡る事を明示しているのである。それだけでなく、先行研究では中山国尼講なる信者の寄合組織については全く論及されていない。功存消息が琉球真宗史上において如何に衝撃的な新事実を伝える史料である事が理解していただけるであろう。図書館の検索カードで筆者が偶然見付けたこの功存消息を直ちに書庫から取り出したのは、伊波普猷論文を通して、琉球の真宗史に関する聊かの知見を有していたからであり、それ故に功存消息の史料的価値を即座に評価する事が出来たからである。

功存消息に出会う前、実は当時の所長千葉乗隆先生から、研究所保管史料の中に琉球関係や女性信仰集団である中山国尼講に関する史料が存在している事をご教示いただいた。『薩摩国諸記』の記事から千葉先生はその事実をご存じだったのである。しかし、その重大さを察知できない筆者は、千葉先生がご教示くださった史料が、伊波普猷らによる先行研究成果を越える程の内容で

はないだろうと浅薄にも勝手に決めつけ、研究所書庫に入る機会が何度もあったにもかかわらず、これらの史料に殆ど興味・関心を寄せなかった。功存消息との出会いが認識を改める機会となり、書庫には琉球真宗史に関わる未知の史料が眠っているに違いないという確信を抱くようになったのである。

千葉先生に事情を申し上げ、書庫での調査をお願いすると、いとも簡単に「許可を下さり、むしろ励まされた。書庫に入ったものの、圧倒的な史料の山に立ちすくむしかなかった。当時の研究所は現在とは異なり、修復前の図書館半地階のそれも奥まった所に位置していた。現在の図書館南門を潜ると右に図書館へ上る階段があるが、その直ぐ奥に半地階へ降る東向きの階段があつて、これを降って一〇歩ほど正面に仏教史合同研究室があつた。

合同研究室正面手前に左へ連なる廊下の奥まった所が研究所である。今は亡き福岡光超先生の研究室も同じ廊下沿いであつた。研究所に入ると直ぐ正面に観音扉があり、書庫はその扉の奥に位置していた。内部は薄暗く、まるで時代劇に登場する与力の事件調書保管部屋のように、縦木と横木が交錯した書架に諸種の目次記が年次別に積み重ねられ、一紙文書などが収められた数多くの木箱も聊か埃を被った状態で、文書の束が雑然と書架に山積みされている事も珍しくなかった。その様な四・五段組の書架が何列も配置され、奥まった所ほど暗さが深まって目次記の表題さえ判読出来ないくらいであつた。その頃、

『諸国江遣書状之留』（『本願寺史料集成』）の翻刻作業に従事していた関係で何度も書庫内に入り、見慣れていた光景ではあつたが、目的を持って改めて眺めてみると、何から着手してよいのか見当すらつかない有様であつた。

取り敢えず、『薩摩国諸記』の琉球関係記事を手懸かりにする事にした。『薩摩国諸記』は千葉先生の解題付きで既に翻刻・刊行^⑤されていたので、これを気軽に活用する事が出来たからである。ところが、『薩摩国諸記』に書き留められた最古の琉球関係記事は、千葉先生が解題で指摘されているように、文化一一（一一一四）年一月二五日付中山国尼講・薩州御戸帳講及び取次寺である大坂浄徳寺が連名で本山に差し出した「御書御染筆写下付願」で、これでは功存消息の寛政元（一七八九）年には到底遡れない。それでも、この「御書御染筆写下付願」から、薩州御戸帳講と中山国尼講は密接な関係がある事、両講の取次寺が大坂浄徳寺である事を知る事が出来たし、更に『薩摩国諸記』嘉永二（一八四九）年からは仲尾次政隆（法名了覚）と彼が率いる中山国廿八日講からの書状も登場するようになり、その取次寺が本山境内の正光寺である事なども明らかになった。その他、琉球門徒の多くが女性である事など、『薩摩国諸記』はその後の調査継続や論文作成にとって実に有意義であつた。

とは言え、寛政元年功存消息に関連する史料の調査は

振り出しに戻らざるを得ず、膨大な史料の山を前に再び困惑し、様々な文書や冊子類を手当たり次第に目を通すしか方法はなかった。書庫内では千葉先生のお目にかかる事も珍しくなかった。書庫内の奥まった電灯下の椅子に右足を左足に組んで腰掛けられ、様々な史料を調べていらっしやったお姿が今も印象深く目に焼き付いている。そのような時には、千葉先生自ら琉球関係史料の所在をご教示くださった事もあった。『講名録 坤 財務局』と表題された横帳や『御講仏御示談簿部分』と表題された冊子などがそれで、この二冊はその後の研究にあって実に貴重な史料となった。

ある時、書架の一角で「天保九戌年正月元旦 北御殿御日記 式冊之内 二十八番 御附」と表題された冊子が目に入った。同じ様な表題の冊子が数冊ずつ数列にわたって配置されていたので日次記の一種である事は直ちに解った。一番上にあつた右記の冊子に触れてみると全体が埃だらけで、他の冊子の中には水分を被ったのか、ほとんど板状態になっている冊子も少なくなかった。右記の冊子は比較的保存状態が良く、何気なく開いてみたら偶々三月一二日条で、そこには

A 『北御殿御日記』天保九（一八三八）年三月一二日条

一 金貳両

中山国
尼講中

右届
金 壹朱

御用人

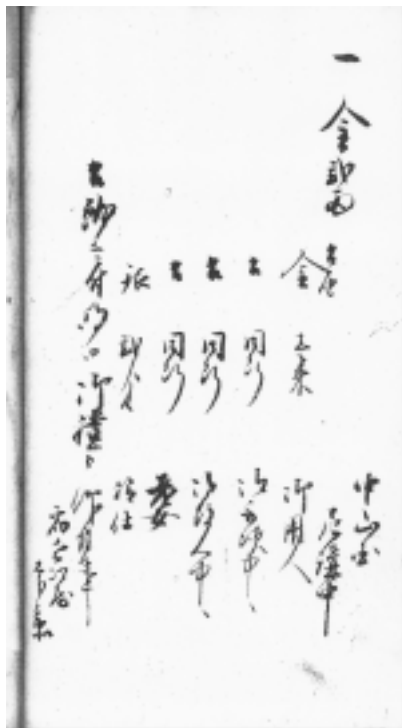
右 同断

御取次中へ

右 同断 御役人中へ
右 同断 老女
銀 貳匁 給仕
右献上二付明日御礼被仰付候事
宿近江屋
太郎兵衛

と記されていた。

写真・『北御殿御日記』天保九年三月一二日条



全く偶然に開いた箇所中山国尼講の文字が記されていたのである。三月一二日中山国尼講中が金二両を献上したという。最後尾には御礼は明日と記されているから、翌一三日条を見ると、

B 『北御殿御日記』 天保九（一八三八）年三月一三日条

御文庫江

中山国

一 金子式両昨十二日献上ニ付今十三日巳半刻 尼講中

御札被仰付候 御盃并ニ御披露書猶又 五人

別段 扇子五本小文庫式ツ多葉粉入式ツ

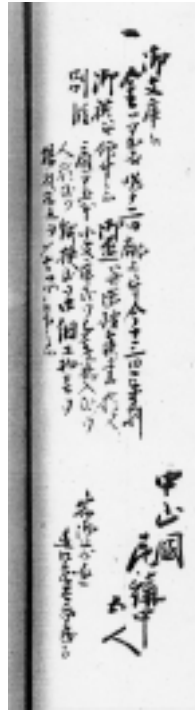
宿御前通

人形式ツ紙挟式ツ御細工物壹ツ

近江屋太郎兵衛方

楊枝指三ツ べ七品被下之

写真・『北御殿御日記』 天保九年三月一三日条



というように、中山国尼講中の五人に対して御盃があり、また金二両献上の披露書と特別に扇子や人形など七品が下付されたという。注目すべきは、琉球門徒の人数だけでなく、近江屋太郎兵衛方という彼らの宿泊所までが記述されている点である。琉球門徒が遙々京都本山まで参詣し、近江屋太郎兵衛方に宿泊していたと解釈する事が出来よう。

琉球人の京都参詣には驚いたが、これに気を良くして、やはり保存状態の良い同日次記の他の年月日を調べてみると、天保七（一八三六）年一月二日には中山国尼講中五人が本山を参詣して細工物など七種が下付、さ

らに遡る天保二（一八三一）年一〇月晦日にも中山国尼講中に対して細工物が下付されている。奇異に感じたのは、『北御殿御日記』は冊子番号が表紙中央に記されて御殿名はその左下に記されている日次記と、御殿名が中央に記され、冊子番号は左下、更にその下に「御附」の文字が記された日次記の二種類があつて、筆記形式に多少の差異は認められるものの、基本的には同月日に同内容が筆録されているのである。筆跡が異なっているので、別の部局でそれぞれ作成されたのではないかと考えられるが、詳細な事情は実のところ現在も明らかではない。

とにかく、右のような偶然的発見によつて閃いたのは、目的の史料を捜し出すのに最も確実な方法は日次記を丹念に捲っていくという事であつた。とは言え、あまりにも膨大な量の、それも多種多様な日次記全てを一人で調査する事は到底不可能である事が予想されたので、当面は功存消息が記された寛政元（一七八九）年までを調査の目標にした。『北御殿御日記』がそうであつたように冊子によつては板状態のものや損壊が著しいものもあり、捲ることを断念せざるを得ない冊子も多々あつた。これらには未発見の琉球関係記事が今も眠っているに違いない。

我慢強く日次記を捲っていくと、琉球門徒の動向が数種類の日次記に記録されている事が次第に明らかになり、その全てが新発見史料であつた。このようにして蒐集できた琉球関係史料によつて、功存が琉球の女性信仰

集団である尼講に消息を著した事情も次第に解明出来るようになった。

C 『御堂日次之記』寛政元(一七八九)年一〇月二二日

条

一若君様

白御書院御出座

午刻前

披露

兵部卿頼明

三人

御盃

御戸帳料

白銀 五枚

年忌志

同 拾匁

中元志

同 拾匁

御正忌志

同 拾匁

新御所様江

同 拾匁

薩州 御戸帳講中
惣代

泡盛 一陶

白砂糖 一曲

氷砂糖 同

天門冬 同

橘餅 一曲

新御所様江

泡盛 一陶

白砂糖 一曲

氷砂糖 同
天門冬 同
橘餅 一曲

中山国

同行中

惣代

右は「寛政元己酉年十月記」と表題された『御堂日次之記』一〇月二二日の記事である。この日、薩州御戸帳講の惣代と中山国同行中の惣代が参詣し、ともに同様の品々を献上している。中山国とは琉球国の別名で、泡盛をはじめとする献上品はいずれも琉球産品である。功存が消息を著した同日に琉球門徒が参詣している事を考慮するならば、功存消息は本山に参詣した琉球門徒が直接受け取ったと考えて問題はなからう。但し、功存消息の宛名である琉球国の尼講中と本山に参詣した中山国同行中は同一であるのか、その判断には慎重な態度が求められる。この問題は後述するとして、同じく『御堂日次之記』寛政元(一七八九)年九月七日条によれば、

一

越前

平乗寺

上京仕候二付御届申上候

月番

内膳

というように、平乗寺功存がこの日上京しているのである。果たして越前に帰郷した月日までは確認出来ないが、一〇月二二日を含む長期の京都滞在であれば、功存消息はやはり琉球門徒の手に渡った可能性は高い。いずれにしろ、琉球真宗史は先行研究が指摘する文政七八（一八二四・五）年頃を更に三五年遡る事が功存消息と『御堂日次之記』を対照する事によつて検証できたのである。

『御堂日次之記』は他の日次記よりも保存状態が良く、一丁ずつ捲っていくのも比較的容易であったから、調査がこれに集中するのは当然の成り行きであった。寛政元年以降も中山国尼講の本山参詣は連年記録されていて、禁制下にありながらも琉球門徒の活動は活発かつ安定的に継続されていた事が窺える。また、いずれの場合も薩州御戸帳講と共に参詣しているから、両講が連携関係にあった事も察しがつく。先述したように、『薩摩国諸記』によれば文化一一（一八一四）年一月二五日中山国尼講は薩州御戸帳講と連名で本山に「御書御染筆写下付願」を差し出し、これを取り次いだのが大坂浄徳寺であった。両講の結成に際しても浄徳寺は重要な役割を果たしている。しかも、この時の浄徳寺住持は暁性で、暁性は功存の弟子智洞の門弟八僧の一人であった。つまり、浄徳寺暁性は功存の孫弟子という事になる。ここに、功存と中山国尼講との接点が見出されよう。確かな史料が存在している訳ではないが、浄徳寺による何らかの取り成しが

あつて、功存は琉球国の尼講に対し消息を発給したであろう事は、「愚老方へも珍しき土産の品度々贈りたまわり」という消息書き出しの文言からも窺知できる。

ところで、琉球真宗史の先行研究は、いずれの場合も仲尾次政隆に焦点が置かれていて、中山国尼講に関しては一切論及されていない。にもかかわらず、一連の日次記に登場するのは中山国尼講が圧倒的に多く、仲尾次政隆や彼を中心に結成された中山国廿八日講に関してはなかなか記録を見付ける事が出来なかった。

この様な時、思い出したのが千葉先生にご教示いただいた『講名録 坤 財務局』や『御講仏御示談簿部分』であった。特に『講名録 坤 財務局』はその表題から全国諸講の講名に関する記録である事が予想できたので、期待して捲ってみると、

天保六末年二月廿七日 同 廿八日講

講名願

御境内

仲了覚

正光寺取立

同行中

というように、仲尾次政隆から講名願が本山に提出されたのが天保六（一八三五）年二月二七日である事が判明した。この年月日を手懸かりに『御堂日次之記』を調べてみると、果たして、

D 『御堂日次之記』天保六（一八三五）年二月二七日条

廿七日 丙辰曇
 晨朝御不座
 御剃刀願人
 白御書院御出座午刻前
 御盃
 披露
 少進 仲潔
 男女六十式人
 当番 采女

白細布 一反
 青銅 廿貫匁
 御戸帳料
 白銀 五枚
 三季志
 同 三拾目
 金子 拾兩
 産物料
 白銀 五枚
 金子 八十三兩
 泡盛 二陶三歩
 東道盆 一組
 香箱 一包
 唐団 貳本
 中山国
 尼講中
 薩州
 御戸帳講中
 中山国
 仲了覚
 同人
 同行中

とあるように、仲尾次政隆の法名了覚が登場し、白細布一反を献納している。右の段階では彼が率いる信仰集団名が「同行中」と記されているから、この直後に中山国廿八日講という正式講名が本山から許可されたと考える事が出来る。先の史料Cで、中山国同行中と中山国尼講中が同一講であるかどうか疑問を呈したが、右の中山国

廿八日講の講名願の事例を考慮するならば、両者はやはり同一の信仰集団であると判断しても問題はなからう。それはともかく、仲尾次政隆が講名願を出したのは彼が二六歳の時である。先行研究では、仲尾次政隆が琉球において布教を開始したのは三五歳の頃というから、『講名録 坤 財務局』や右の『御堂日次之記』の記録は従来の見解をおよそ一〇年ほど遡らせる貴重な史料なのである。

右の『御堂日次之記』の記録はもう一つ重要な問題を提起している。すなわち、仲尾次政隆並びにその同行中と中山国尼講中の本山参詣が同日になっているという事である。ということは、彼らは遙々琉球から同道上京して来たという解釈が可能になる。ところが、『薩摩国諸記』には仲尾次政隆が嘉永元（一八四八）年六月二六日付で京都正光寺に宛てた書簡が写し留められていて、それには「私事去々年十月頃より尼講にも不図附逢相成候」とあるように、仲尾次政隆と中山国尼講の接触は弘化三（一八四六）年一〇月頃からだという。先の『御堂日次之記』の記録では両者は同年月日に本山を参詣しているにもかかわらず、仲尾次政隆のこの文言は何を意味しているのだろうか。中山国尼講の存在を知らながらも交流はなかったという事だろうか。琉球真宗史の新事実が明らかになれば、それだけまた新たな疑問が生じてくる。

以上が第一調査の概要である。偶然の発見から開始し

た事に相応しく、調査は試行錯誤の繰り返しであった。そもそも如何なる史料が保管されているのかさえほとんど知識がなく、したがって何から着手してよいのかすら見通せなかった。偶然の連続という幸運にも恵まれ、予想以上の成果を得ることが出来、琉球真宗史に新たな史実を提供する事が出来たのである。

三 第二次調査の成果

調査を再開するのに、まさか二五年もの歳月が経過するとは思っても寄らなかつた。この間、単にサボタージュしていた訳ではない。弁解がましくなるが、筆者本来の専門分野は琉球時代の民族宗教史で、折に触れ学界で発表してきた研究成果を纏める作業に傾注しなければならなかつた。漸くこの作業から解放されたのも束の間、職場での雑用が飛躍的に増加するようになり、調査に傾ける時間的・精神的余裕がなかつたのも事実である。更に、第一次調査に基づく成果の歴史的意義を發展させるために、真宗史だけではなく、琉球時代における仏教全体の歴史像構築という壮大な課題にも挑戦するようになり、この研究に全力投球するようになっていたのもまた事実である。そしてこの作業が一応の形になった時、その成果には何と寛政元（一七八九）年以前の琉球真宗史が脱落していたのである。

当然、この問題が当面の課題として脳裏を離れる事は

なかつた。冒頭でも述べたように、調査中断期間においても、研究会など年に二・三度左右田氏とお会いする機会があつた時には、新たな琉球関連史料に関する情報をいただくこともあつたので、調査再開の必要性を痛感していた。こうして忘れもしない二〇〇九年二月一九日、現所長の赤松徹眞先生に調査の申請書を提出し、ご許可が得られ、第二次の調査を即日開始したのである。

二五年という歳月の懸隔は、調査方法だけでなく周辺状況も大きく変化させるのに十分過ぎる程の時間だったようである。既に千葉先生をはじめとして、現役時代に学んだ恩師は全てお亡くなりになっていた。何よりも顕著な変化は研究所の様子である。昔の研究所は正面を入つた右奥に窓が設置されていたものの、半地階という事もあつて採光状態は芳しくなく、全体的に薄暗い雰囲気であつた。その窓の手前に宮崎円遵先生の机があり、宮崎先生がご在室の時は、机と手前の部屋との間に屏風のような衝立が置かれていて宮崎先生のお姿が見えないにもかかわらず、研究所内にはピリピリとした緊張感が漲つていたことを覚えている。大宮図書館の全面修復により、それまで半地階の奥まった場所にあつた研究所と書庫も同じ半地階の南西側に移設されて全面改装された。照明や空調設備も整備され、全体的に明るくなったが、レンガ積みと漆喰で塗り固められた湿感のある壁の研究所が如何に風情があつたか、懐かしく想い出される。

移設に際しては、膨大な史料も移動しなければならな

い。この作業に研究所の方々はかなり苦勞されたはずである。書架に積み重ねられていた『諸国記』や日次記などの冊子類は新しいダンボール箱に収められ、保管状態は比較にならないほど改善された。調査する側にとつての利便性は高まったが、調査対象である日次記などの年代が変われば、その都度目的のダンボール箱を書庫から出し入れして下さる所員の方々に対し、頻繁にお手を煩わせてしまっている事を誠に申し訳なく思うと同時に、感謝の念に絶えない。

さて、第二次調査の究極の目的は、寛政元(一七八九)年以前の琉球関係史料の発掘である。第一次調査の経験から調査対象も日次記に絞っていた。それでも、書庫内には如何なる種類の日次記が保管されているのか、その年代は何時から何時までなのか、総数は何冊に及ぶのか、いずれも予測がついていた訳ではない。やはりこの場合も左右田氏にご教示を仰ぐ事にした。

ご教示によれば、最も長期に亘って継続的に筆録された日次記は『御堂日次之記』で、寛文一(一六七)年から明治三(一八七〇)年まで、但し、宝暦一〇(一七六〇)年から安永六(一七七七)年までは欠本という。次に『長御殿御日次帳』が正徳二(一七二二)年から天保二(一八三一)年までで、この日次記によって『御堂日次之記』の欠本分が補えるという。そして、第一次調査の時には筆者がその存在さえ知らなかった『起居筆記』という日次記があり、安永七(一七七八)年から文化九

(一八一二)年までが筆録されているという。

左右田氏のご教示は大変有り難かったが、冷静に考えてみると、これはとんでもない事になりそうな予感がした。調査開始で判明したことであるが、例えば、これら日次記は一ヶ月の記録が一冊に纏められ、通常なら一ヶ年分一二冊が一箱に収められている。閏月のある年には一三冊、さらに一ヶ月の記録が分冊になっている場合もある。左右田氏によれば、『御堂日次之記』だけでも総数二〇七箱が保管されているというから、単純計算でもおよそ二四八〇冊以上になる。但し、今回の調査は寛政元(一七八九)年以前を調査対象にしているから、『御堂日次之記』の欠本分も差し引くとおよそ一二〇〇冊くらいになる。これに欠本分を補うため、当然、『長御殿御日次帳』も調査する必要があるに、史料の記事内容の信頼性を確認する上で、『起居筆記』も調査しなければならぬ。果たしてその様な調査が筆者一人で可能なのか、一瞬どころか結構躊躇したのは紛れもない。しかし、歴史的眞実を知りたいという探求心が辛うじてその躊躇を踏み越えさせてくれたように思う。

調査は冊子の保存状態が最も良好な『御堂日次之記』から開始した。今考えると何を血迷ってしまったのか、調査初日は最も古い寛文一(一六七)年から始めてしまったのである。可能な限り古い史料を早く発掘したいと我ながら焦っていたのである。それでも気合だけは十分だったようで、寛文一一年から延宝三(一六七

五) 年までの一一冊を一気呵成に捲る事が出来た。それもそのはずで、寛文一一年から延宝三(一六七五)年までの『御堂日次之記』は三ヶ月分が一冊に記録されていたからである。この時期まで、本山と各地域門徒の交流はさほど活発ではなかったようだ。あるいは本山の地域統制が十分には浸透していなかったのかもしれない。それはともかく、薩摩門徒関係の史料二点を見付けたが、琉球関係はその気配すらなかった。帰りの電車内で反省しつつ、翌日から初心に戻って天明年間から調査する事に決めた。同時に、薩摩関連史料も蒐集する必要性のある事に気付いた。琉球への真宗伝播の事情を解明するには、薩摩門徒の歴史的動向や琉球門徒との関係も把握しておく必要があると思ひ直したからである。

調査二日目の二月二〇日は前日の反省を受け、かつ念には念を入れるため第一次でも調査した寛政元(一七八九)年『御堂日次之記』から再開し、調査記録も作成する事にした。それによれば、この日だけで寛政元(天明九)年一五冊と天明八(一七八八)年六月までの七冊、計二二冊を調べている。確かこの日は午前中から夕方まで作業を行い、余程気合いが入っていたのか、我ながら天晴れという表現が過言ではないくらい一心不乱の集中力を発揮した記憶がある。午後四時半頃に終了して研究所を出ると、膝がガクガクして体中が痛かった。第一次調査は筆者が二〇代後半から三〇代前半の頃で、再開の第二次は還暦手前であった。第一次の頃、『本願寺年表』

作成のため興正会館に泊まり込んで作業を行った事がある。福岡光超先生も時折来られ、作業一五分くらいでよく「疲れた」と仰っていた。あの時の福岡先生のお気持ちが今更ながら想い出されるし、よく理解できる。今後調査を予定されている方々には、可能な限り体力が充実している若い時代の実施をお勧めしたい。

さて、期待通り寛政元年以前においても琉球門徒の活動を確認する事が出来た。天明年間(一七八一〜八九)だけでも中山国尼講は都合七回本山を参詣している。ほとんどが薩州御戸帳講との同道である。これらを含め、今後発見出来る史料は全て琉球真宗史に新たな事実を提示する事になる。しかも、安永七(一七七八)年までは『長御殿御日次帳』・『起居筆記』も同時並行で記録されているから、この間、『御堂日次之記』に琉球関係記事があれば、『長御殿御日次帳』・『起居筆記』の同年月日を捲れば同様の記録を見付ける事が出来る訳である。調査は効率的になるが、逆に労力が増す事は言うまでもない。それでも、新史料の発見は何事にも代え難い喜びであった。特に次の史料に遭遇した時は、踊躍歓喜とはまさにこういう事を言うのだろうと思つたくらいである。

E 『御堂日次之記』天明二(一七八二)年五月二日条

象牙細工唐扇二 御寺内正光寺門徒

一 蠟石香箱 薩脇久志 中村宇兵衛

沈香

新御所様江

象牙細工唐扇二

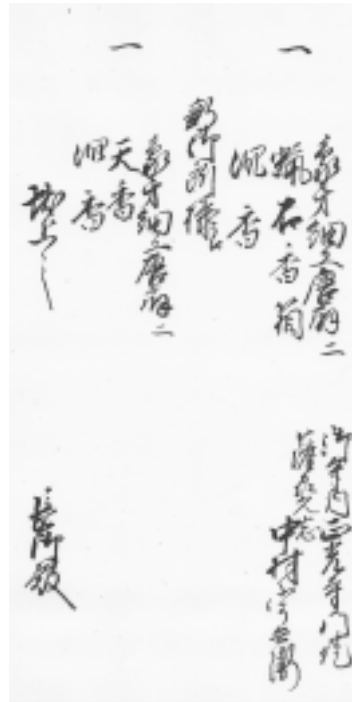
一 天香

沈香

献上之

長御殿

写真・『御堂日次之記』天明二年五月二日条



天明二（一七八二）年五月二日、薩摩久志の中村宇兵衛が本山を参詣し、象牙細工唐扇や沈香などを献上したという。中村宇兵衛はかの仲尾次政隆の直系先祖で、中村宇兵衛と琉球妻である思嘉那の長男仲濱政栄から数えて四代目が仲尾次政隆である。しかも中村宇兵衛の名は琉球側の史料には二度しか登場せず、琉球以外では初登場の史料という事になる。加えるに「御寺内正光寺門徒」という肩書きは、伊波普猷が「彼の先祖は真宗の信者であつた」という推測の確かさを証明していて、仲尾次政

隆が真宗に帰依するようになる経緯を分析するうえで貴重な史料なのである。勿論、『長御殿御日次帳』・『起居筆記』の同年月日を捲つてみると、いずれにも同内容の筆録があつた事は言うまでもない。

調査二日目にして、さい先の良い大収穫に気を良く帰宅し、早速、仲尾次政隆の系図『宇姓家譜』を調べてみると、

康熙四十七年戊子生月日不祥乾隆四十七年丙申十二月初十日死寿六十九号雄山。

とあるように、中村宇兵衛は康熙四十七年すなわち宝永五（一七〇八）年生まれで、乾隆四一年すなわち安永五（一七七六）年一二月一〇日六九歳で亡くなっているではないか。つまり『御堂日次之記』に記録されている中村宇兵衛の本山参詣天明二（一七八二）年五月二日の時点で、中村宇兵衛は死没してから既に六年が経過している事になる。これは一体どういう事なのか。家系図の製作には、多少なりとも粉飾が施される可能性がある事を念頭に置くべきだが、この場合、『宇姓家譜』と『御堂日次之記』の記録のいずれが信頼出来ようか。次節で詳述するが、冒頭で述べたように、一連の日次記の筆録内容に疑問を持つ契機になる史料であつた。

踊躍歡喜が一転して意気消沈、気を取り直して調査を継続すると、その頑張りに日次記は大いに応えてくれる

のである。かなり時期は遡るが、中村宇兵衛は生前には確かに本山を参詣していた。

F 『長御殿御日次帳』明和二(一七六五)年三月一三日
条

御香百目入 一箱 薩州久志
磨製朱肉 一箱 中村宇兵衛

国分多葉粉 一箱

泡盛 一壺

新門様へ 方金 三百疋

御香 一包

唐扇 一柄 右同人

方金 百疋

右同所

泡盛 一壺 中村次郎左衛門

新門様へ 方金 三百疋

御香 一包

方金 百疋

一 椎茸 一箱

方金 百疋 右同所 関弥五左衛門

新門様へ

椎茸 一箱

銀子 一両

右之通献上之

明和二(一七六五)年三月一三日、中村宇兵衛は中村

次郎左衛門・関弥五左衛門と共に本山を参詣し、泡盛や御香・懇志などを献納している。中村宇兵衛五八歳の時である。同道した中村次郎左衛門はその姓から一門の者と考えられるし、鹿児島県坊津輝清館の学芸員橋口亘氏に電話で尋ねてみると、関弥五左衛門の関姓も久志では知られた姓であるという。中村宇兵衛の本山参詣は間違いないと考えてよからう。伊波普猷によれば、中村宇兵衛は琉球と薩摩を往来する船を所有していたという。⁸⁾から、京都への参詣も大坂までは所有船での渡航であったかもしれないし、琉球への真宗伝播にも関わっていた可能性も考えられるのである。

筆者の体力的問題はともかく、調査は順調に進んだ。年代は前後するが、次に紹介する二点の史料も琉球真宗史上における画期的な発見の一つである。

G 『御堂日次之記』安永八(一七七九)年九月二日条

一 御盃 七人

トンソン 一徳 橋餅キンゼヤン 一曲

太白砂糖 一曲 氷砂糖 一曲 中山国那波

天門糖 一曲 白銀式拾目 尼講中

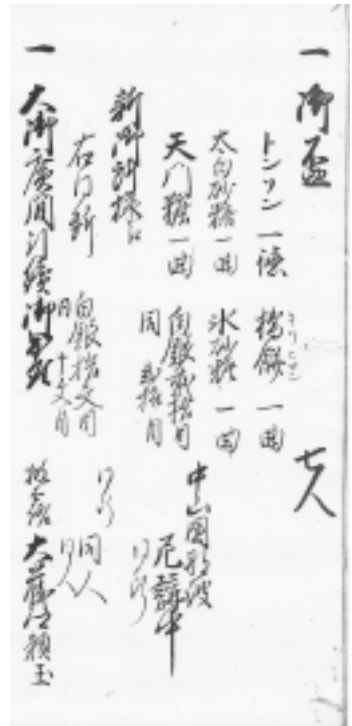
同 式拾目 同断

新御所様江

右同断 白銀拾文目 同断 同人

同 十文目 同人

写真・『御堂日次之記』安永八年九月二日条



安永八（一七七九）年九月二日、琉球の中山国尼講中が参詣し、トンソンや橘餅などを献納したという。「中山国那波」という肩書きは中山国尼講の所在地すなわち那覇を意味している。献納品は琉球門徒が本山を参詣する時の定番で、この年以降の史料にも登場しているが、その内、トンソンに関して最初はそれが何なのか判断に苦しんだ。後にそれは泡盛である事が判明したが、泡盛の当時の呼称なのか、容器の名称なのかは未だに解っていない。橘餅は琉球方言では「チッピン」あるいは「チップン」と呼ばれ、琉球産柑橘類の皮と砂糖を混ぜて製造される高級菓子で、当時は首里や那覇の上流士族しか食せない高級品であった。筆者も食した経験がなかったもので、沖縄からわざわざ送ってもらって味わったくらいである。現在でも橘餅を製造・販売しているのは那覇の一店だけという。

右の史料とほぼ同内容の記事が『長御殿御日次帳』と『起居筆記』にも記録されていた。問題は『起居筆記』の筆録内容である。

H『起居筆記』安永八（一七七九）年九月六日条

一去ル二日琉球国尼講中名前少く相違仕候、委敷記

ス、

左之通

寺ノ城	真牛金	モシカチ	サガリノ	真那樽	マナタケ
カ々津ノ	乙	亀クノ	真乙金	メトカチ	
サマノ	真鶴金	トキノ	真蒲戸	マカマド	
伊室ノ	ゴズイ	ハイロヤノ	金城アンマ		

去る九月二日に参詣した中山国那波尼講中面々の名前が少々間違っていたので、訂正して正確な名前を次に記述する、と解釈してよからう。問題は参詣した面々の名前である。中山国尼講という講名からして、女性による信仰集団と考えられていたが、右の史料はその事を証明している。名前はいずれも女性名で、例えば、「真牛金」は琉球読みでモーシガニ、「真那樽」はマナダルーと発音する。肩書きの「寺ノ城」はテイーラヌグシク、「ハイロヤノ」はパイロヤヌと発音し、いずれも屋号である。つまり、屋号は遊廓の屋号で、したがって女性はいずれも遊女もしくはその抱え親（使用人）という事になる。筆録者が名前を聞き間違えたか書き間違えたか、いずれ

如何なる社会的身分・職能の人達であったのか、新たな課題が途切れる事なく生じてくるのである。

右の史料は、中山国尼講に関するもう一つの重要な事実を提供している。すなわち、右の史料以前、いずれの日次記にも中山国尼講に関する記事はもはや筆録されていない。右の『長御殿御日次帳』安永五(一七七六)年七月一六日条が中山国尼講に関する最古の史料という事になる。当然、薩州御戸帳講の構成員による遊女への布教活動の開始や、遊女による同行中の結成も右の年代をさほど遡る事がない時期に想定する事が可能になってこよう。

さて、第二次調査最大の成果について述べてみたい。調査開始から三ヶ月弱が経過した四月一三日、この間の実質調査日数は一四日である。新年度が始まってからは一週間に一度の研究日しか利用できず、ペースは俄然鈍ってきていた。この日も調査終了時刻が近づいていて、『御堂日次之記』が欠本となる手前の安永七(一七七八)年までは何とか捲り終えたいと思ひ、心身共に疲労困憊にもかかわらず、氣力を振り絞って一一分分を捲っていた。琉球関係記事は登場しそもない氣配だったが、最後の晦日に筆録されていたのが次の史料である。

J 『御堂日次之記』安永七(一七七八)年一二月晦日条
一 大天香 一箱 琉球国 中濱了信
献上之 同 中里了教

(中略)

同 中村了證
長御殿
一 琉球国 中濱了信
同 中里了教
同 中村了證
右三人 江干菓子五種被下之

説明するまでもないと思うが、琉球国の中濱了信・中里了教・中村了證の三人が参詣して大天香を献上し、それに対して三人へ干菓子五種が下付されたという。右の三人の名前には見覚えがあったが、取り敢えず、先に同年月の『長御殿御日次帳』を書庫から出していただき、一二月晦日を開けてみると、次のように筆録されていた。

K 『長御殿御日次帳』安永七(一七七八)年一二月晦日条

大進 少進
晦日 侍従 病氣断
讚岐守
一 申御経 御免 薩劬
願人 久志 中村教閑
一 大天香 一箱宛 中濱了信
両門様江 琉球国

沈香 一包 中里了教

中村了證

右三人 江包菓子被下之 ^{一包}

薩摩

一 沈香 一包 中村教閑

献上之

琉球国の三人が薩摩久志の中村教閑と共に参詣し、先の『御堂日次之記』に記されていた「干菓子五種」が三人に対し一包にして下付された事が解る。薩摩久志の中村教閑という人物の素性が判然としないが、中村宇兵衛と同郷でしかも同姓であるから、一門の者と考えてよからう。

問題は琉球国の三人である。仲尾次政隆の家譜『宇姓家譜』によれば、中村宇兵衛と琉球妻思嘉那との間に生まれた五人の子息のうち、長男政栄は仲濱家の、次男政明は仲里家の、四男政根は仲村家の、五男政記は仲里家、後の大湾家のそれぞれ祖になっている。三男政孝は中村宇兵衛の嗣子として薩摩久志に移住した。右の史料の琉球国三人は姓こそ仲濱が中濱に、仲里が中里に、そして仲村が中村になっているが、実は中村宇兵衛の子息政栄・政明・政根に間違いないのである。先述したように、政栄の曾孫が仲尾次政隆である。仲尾次政隆の真宗入信はこのような家系的環境に拠るものと考えてよい。

彼ら琉球国三人の本山参詣は安永七（一七七八）年一

一月晦日だけではなかった。その後の調査で遂に琉球真宗史上における決定的な史料を発見するのである。

『長御殿御日次帳』明和四（一七六七）年九月一三日 条

一 官香 一包 薩州久志 中村教信

一 沈香 一包 琉球国 中村了信

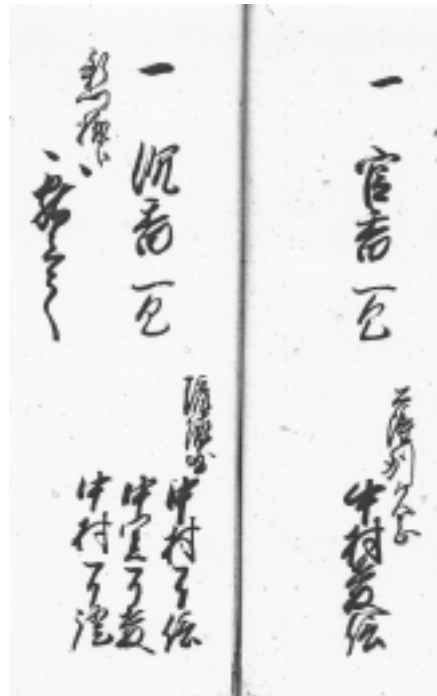
新門様江 中里了教

献上之

右の筆録は、先の『御堂日次之記』や『長御殿御日次帳』の安永七（一七七八）年一月晦日条と一見同じように見えるが、薩摩久志の中村教閑が中村教信に、琉球国三人のうち仲濱了信が中村了信になっている。中村教信はともかく、中村了信が仲濱了信であることは言うまでもない。明らかに筆録者の誤筆である。彼ら琉球国の三人は、安永七（一七七八）年の一一年前にも本山を参詣していたのである。安永七年の時、中村宇兵衛は既に没後二年が経過していたが、右の明和四（一七六七）の場合には六〇歳の時に相当する。そうすると、右の中村教信は中村宇兵衛である可能性が考えられるし、安永七年の中村教閑は中村宇兵衛の嗣子として薩摩久志に移住した琉球の三男政孝である可能性も考えられるが、現時点

では推測の域を出ない。

写真・『長御殿御日次帳』明和四年九月一三日条



それよりも重要な事は、右の明和四（一七六七）年の史料を最後に、時期を遡って琉球関係の記録は『御堂日次之記』にも『長御殿御日次帳』にも登場しないという事である。この事を確認するために、『長御殿御日次帳』の最初の冊子である正徳二（一七一二）年迄、更に『御堂日次之記』にいたっては改めて寛文一一（一六七二）年迄を捲る必要があった。薩摩諸講の記録は依然として登場するが、琉球関係はもはや登場しないと次第に察しがついてくる。それでも最後まで捲る作業は、期待感がほとんど持てなかっただけに、これは本当に辛かった。歳老いてから単独でこの様な調査は無茶だと何度も思わ

ずにいられなかった。それでも頑張れたのは、この確認作業によって、琉球への真宗伝播の時期やその担い手の解明が可能になるという確信があったからである。結果、右の『長御殿御日次帳』明和四（一七六七）年九月一三日条が琉球真宗関係の最古の史料である事が判明し、したがって、琉球への真宗伝播は中村宇兵衛こそがその担い手であり、伝播の時期も中村宇兵衛が琉球へ往来するようになった時期に求める事が出来るようになった。

（以下、次号）

註

- ① 史料紹介 西本願寺蔵琉球関係史料〔『神女大史学』第七号、一九九〇年〕、「史料紹介 浄土真宗琉球関係史料」〔『神女大史学』第二六号、二〇〇九年〕。
- ② 『沖繩宗教史の研究』（一九九四年）、「浄土真宗琉球伝播の歴史的前提 ―薩摩門徒の動向を中心に―」〔『神女大史学』第二七号、二〇一〇年〕、「浄土真宗琉球伝播の時期と薩摩門徒」〔『沖繩文化』第四五卷一号、二〇一一年〕。
- ③ 龍谷大学図書館蔵『真宗小部集拾』。
- ④ 『伊波普猷全集』第九卷、一九七五年。
- ⑤ 『日本庶民生活史料集成』第一八卷、一九七二年。
- ⑥ 前註④二五六頁。
- ⑦ 『那覇市史』資料編第1巻8、一九八三年。
- ⑧ 前註④二五〇頁。
- ⑨ 前註④二五八頁。

⑩ 島尻勝太郎『近世沖繩の社会と宗教』一八一頁、一九八〇年。

(ちな ていかん 神戸女子大学教授)

※ ※ ※ ※ ※ ※

《本願寺史料研究所の新体制》

二〇一二年度四月より、本山本願寺の寺務体制や宗派の伝道本部(宗務所)の寺務体制が更改されたことに伴い、本願寺史料研究所の体制も少し変更がありました。

新体制のメンバー構成は、以下の通りです。

- 所長 赤松徹眞
- 副所長 金龍 静
- 上級研究員 大喜直彦
- 研究員 大原実代子・佐藤文子
- 研究助手 近藤俊太郎・大塚由美・武田美桜
- 委託研究員 首藤善樹・高島幸次・左右田昌幸
- 岡村喜史
- 研究生 尾崎誠仁
- 臨時勤務員 青谷美羽

【編集後記】

今回と次回は、神戸女子大学の知名定寛先生に、本願寺

の歴史史料が潜在的に持っている地域真宗史における研究利用の可能性を、目一杯、提示していただきました。先生の後に続いて、琉球や薩摩の真宗史の追求を目指す若手にとって、どれほどのエネルギーと根気が必要であるのかを想像してもらえないかと思えます。先生の御記述の中で、はるか以前の本願寺史料研究所の風景の記憶を喚起され、編集子は思わずメロディとともにスパイダース時代の堺正章と井上順の歌声を思い出してしまいました。ただ、折角の御論考を一举掲載できず、変則的な分割掲載になったことを、知名先生にお詫び申し上げます。

編集子が専任教員として勤務する大学で、四階の自分の研究室に行くときに、必ず目に入る大額があります。額には「物之興廃必由人々之昇沈定在道」とあります。弘法大師空海の言葉だそうです。十数年間、この言葉を見続けてきたことになりました。

思い起こしても「なるほど」と納得する光景を目にしたな、さらに現に目にしているなど、実感することが多くなりました。しかし、この実感する光景の中の「人」には、自分も含まれていることを忘れてはいけなことも実感させられる状況です。

では編集子にはどのような「道」があるのか、還暦を目前にしても、よく見えていないのが現状です。(歩弥紡)